

新春に思いを寄せて

代表 晝間 初枝



2021年 様々な思いを抱き、新春をお迎えのことと思います。昨年は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、自然観察会等の活動は中止や縮小せざるを得ない状況になりました。その後、3密の回避、「新しい生活様式」の定着により、一部の活動は再開されましたが、感染拡大の勢いはとどまることなく収束は不透明な状況にあります。一年前、当たり前の日々がこれ程大きく変容することを誰

が予想していたでしょうか。

ウィルスの情報は不確かながら、動物から人への感染とも言われています。自然界は、全ての生物がつながり・支え合い、時にはせめぎ合いを繰り返しながら、バランスのとれた環境がつけられています。しかし、それらが壊されると今まで接触することがなかった人と動物の棲み分けが崩れ、人里や街中にまで寄ってきた動物と接触することもあります。私はその中に潜む怖さを感じます。また昨年は、台風の直撃がなかったこともあり、秋には木々の葉が見事に紅葉、一昨年、大木をなぎ倒した大型台風の襲来が嘘のようでした。しかし近年は、想定外・未曾有の災害がいつ起こってもおかしくない状況です。まさに、自然破壊や温暖化による気候変動、種々のウィルスの感染拡大は、グローバル経済を止め、人間社会に何らかの警鐘を鳴らしているように思います。

コロナとの付き合いはまもなく二年目に入ります。自由に行動できない不安な日々は暫く続きますが、必ずみなさんと集い、語らい、笑い・・・交わる日が来ることを信じています。

2021年が健康でよりよい年になりますようお願いしております。今年もよろしくお願い致します。

新春の堂谷津の里 のんびり散策

強い寒気で冷え込んだ朝、里山の田んぼは薄氷、セグロセキレイとツグミを見つけて気持ちはほっこり。鳥たちのさえずりを聞きながらヨシ原へ。パキパキ！夢中になって餌を啄むシジュウカラ、メジロ、ここは鳥たちの絶好のえさ場。アオジの鳴き声、ウグイスの地鳴き、ジョウビタキも近くにいます。

足もとの枯れ草の間にオオイヌノフグリやホトケノザの花、たくましさ感動。地面にへばりついているロゼット葉、殺風景な土の上に居座る様、緑がうれしい。厳冬を生き抜く知恵、強さに感服。

コブシは、温かなコートに身を包んだ冬芽が日ざしを浴びて眩いくらい、春にはたくさん花が咲いてくれそう。葉を落とさずしっかり枯葉をつけているヤマコウバシは、“おちない”ことから合格祈願の木。葉っぱは受験生のお守りとして一躍有名に。冬は生き物は少ない。確かに多くはないが冬こそ隠れている虫を探す楽しみがある。虫にとっては迷惑なこと。眠りを覚まされ、寒さにさらされ、何てこと！怒られそうだが「ごめんなさい」と言いながら朽ち木の中にヤスデをみつけ！ 樹皮の裂け目をのぞいてみる。日なたの落ち葉の上でキタテハがひなたぼっこ、スマートでかっこいいクビキリギス、どちらも成虫で冬を越す少数派の昆虫。そろそろシュンランの花芽が顔を出す頃・・・。コロナを忘れて、贅沢な里山歩きを楽しむ。(晝間)



堂谷津の里ってどんなところ

千葉県若葉区谷当町、谷津の最奥部、耕作放棄された谷津田の再生から始まった活動も十年目を迎えます。「冬期湛水・不耕起栽培、無農薬」の米作りにより、ニホンアカガエルやハイケボタルなど、かつて生息していた生きものが戻ってきました。さらに斜面林や湿地の整備を行うことで様々な生態系が復活し、生物多様性が取り戻されつつあります。現在は、里山の豊かな自然を守りながら、その魅力に親しみ、楽しむ様々なイベントや体験活動を行っています。



四季の野草を楽しむ 自然野草園

アズマネザサの林、自生する野草を残しながら整備した野草園は四季折々の野草を見ることができます。ハンショウツル、ワニグチソウ、クサナギオゴケ、イヌショウマ、サラシナショウマ・・・。樹木の根元から湧水が流れ出て、夏でも涼しい空間です。オニヤンマのヤゴやサワガニなどが生息、堂谷津の里のホットスポットです。



カワセミが巣立った 堂谷津の池

最奥部にある湧水のため池は、田んぼの水の供給源です。周辺の環境の変化とともに滲み出す水は減り、田んぼの水管理に苦労しています。夏は暗闇にハイケボタルが飛翔、幻想的な光景が見られます。去年初めてカワセミが産卵、幼鳥が巣立っていきました。



森で遊ぶ こならひろば

森の入口、シンボルツリー・コナラの巨木を中心とした広場は、谷津田や斜面林など堂谷津の里を一望に見下ろすことができます。みんなが集い、学び、遊ぶ空間として活用、アイデアで様々な活動を生み出すことができます。森の音楽会、アスレチック、基地づくり、クラフト、ドングリ拾いなど

堂谷津の里（NPO 法人バランス21）

近況ご報告 ～コロナと共に～

小西博典(千葉市)

今春、新型コロナウイルス感染症対策として緊急事態宣言が発令され、私の所属する活動団体、講座等ほとんど全ての活動が休止状態となった。

孫、子供たちからは“年寄りはいっと家に居たほうがいいよ”と強く言われ、時間を持て余す日々が続いた。そこで思いついたのが永年懸案の老夫婦の終活「エンディングノートの作成」であった。

私たち夫婦のエンディングノートは、緊急時のための個人情報「終活忘備録」と「介護・治療・葬儀及び遺産相続等に関する要望書」の二部構成とした。

個人情報を整理して驚いたのは情報量の多さで、マイナンバーから始まり、年金関係、動産、不動産、保険、カード類等々その価値の多少には関係なく、緊急時遺族がこれを短期間にて正しく認識するのは至難の業だと痛感した。

「介護・治療・葬儀及び遺産相続等に関する要望書」については、自分の我儘・身勝手な生き方を家族が受け入れてくれたことに感謝し、今後終焉に向けての過ごし方を夫婦で話し合い、その希望を子供たちに伝え、合意を得る事が出来たことは大変良かったと思っている。

一方、私ども夫婦は数年前に金婚式を迎え永年生活をともにしているが、今回のように毎日24時間一緒に一つ屋根の下で暮らすのは初めての事であり、年を取ったせいかわちよとしたことで口喧嘩となり気まずい雰囲気になってしまう日々が多くなった。

そこで、夫婦仲良く過ごせたかどうか、カレンダーにその日の結果を○・×で記入することにした。不思議なことにカレンダーに×を記入したくないと思うせいか意外と我慢ができるようになり、それなりの効果はあったと思う。

お蔭で現在はカレンダーのお世話にはならず何とか引きこもり生活を楽しんでいます。お困りの方は一度お試しあれ？

最後になりましたが、このような環境下でもいろいろと工夫して、自然観察指導員としてご活躍の皆さんに敬意を表するとともに、一日も早く平常な生活に戻るよう祈りつつ、自粛生活を楽しくしていきたいと思っています。



千葉県生涯大学園芸学部にて学んだ成果？

スイセンの開花ピーク

藤田 隆 (松戸市)

12月の初め、事務所にスイセンが届けられた。年明け1月がスイセンの旬なのではと思ったが、届け主が言うには「いまの12月から開花期でね」との返事。そういえばと思い出したのは、5年前の1月、低山めぐりで嵯峨山のスイセンピークを訪れたことだった。鋸南町と富津市の郡界尾根上に冬になるとスイセンの咲き乱れるピークがあるというのが広まっていつのまにかスイセンピークと呼ばれるようになったらしい。

嵯峨山は315mと低山なのだが、ピークのぼり口から急登で虎ロープが張ってある。ヤセ尾根が続きロープの手助けなしでは登り切れない難所。這いつくばるように30分ほど上り詰めるとピークに到着する。慣れない登山をした筋肉が悲鳴を上げた。

尾根を歩いているときに後ろからきたペアが抜いていった。小鋸から鋸山に尾根歩きをするという。この尾根歩きは難易度が高い。というのも馬の背のような尾根に加え、倒木が障害物になっているためだという。

嵯峨山の頂上から周回コースで麓に戻ると畑のスイセンがゆっくり楽しみ、近辺の国道沿いはスイセンが咲き乱れている。低山登りで失われた体力が癒されていった。スイセンを見ると今も腿裏のハムストリングがピシッと音を立てるような気がする。



(右のピークが嵯峨山?)

(余白埋めです)



北の国だより

明けましておめでとうございます。千葉県も年明けから寒い日が続いていますが、北海道では、マイナス30℃近くまで冷え込んでいる地域もあります。私の住む札幌も、最高気温も氷点下という日が続いており、これまでのように、気軽に森の散歩に出かけることは難しくなりましたが、千葉では見られない冬の北海道の自然を楽しみたいと思います。
(佐野由輝)

ナウシカの蟲笛はアイヌが起源？

宮崎駿のジブリ映画は、自然観察会のネタが満載ですよ。トトロ、ラピュタ、もののけ姫、そして、昨年末に再放送していた風の谷のナウシカもそうですね。ナウシカが、王蟲やウシアブの怒りを鎮めるために使っていた蟲笛（うなり音を鳴らす笛）ですが、アイヌの子どもたちの遊び道具にそっくりな物があったのです。10月1日号でも少し紹介しましたが、アイヌの子どもたちは、イタドリ（アイヌ語でクッタラ）の節を抜いて、紐で結び、ブンブンとまわしてうなり音を楽しんでいたようです。セミ笛のようなものといったらピンとくる人もいるかもしれませんね。いい機会なので、私も作ってみました。太さ、長さによって音が変わるので面白いですよ。



カシワの葉っぱが落ちたら金を返す

12月に入ると、トドマツなどの針葉樹をのぞけば、札幌市内の木々のほとんどは、全ての葉っぱを落としています。そうした中、洋の東西を代表する我慢強い木が枯葉を枝に残していました。東の横綱は千葉県でもおなじみのカシワの木。その我慢強さから縁起を担いで柏餅に使われていますよね。一方の西の横綱はレッドオーク。別名アカガシワです。これから、本格的な雪のシーズン。雪の重みに耐え、最後まで葉っぱを枝に残すのは東西どちらのカシワでしょうか。

さて、カシワの葉っぱの特徴を見事に表した北海道の言い回しがあります。お金を借りた人が貸した人から早く返すようにと催促されたとき、「カシワの葉っぱ落ちたら金を返す」と答えるそうです。さて、金が戻ってくるのはいつの日になることやら。



左がアカガシワ、右がカシワ

クリスマスツリーは何の木？

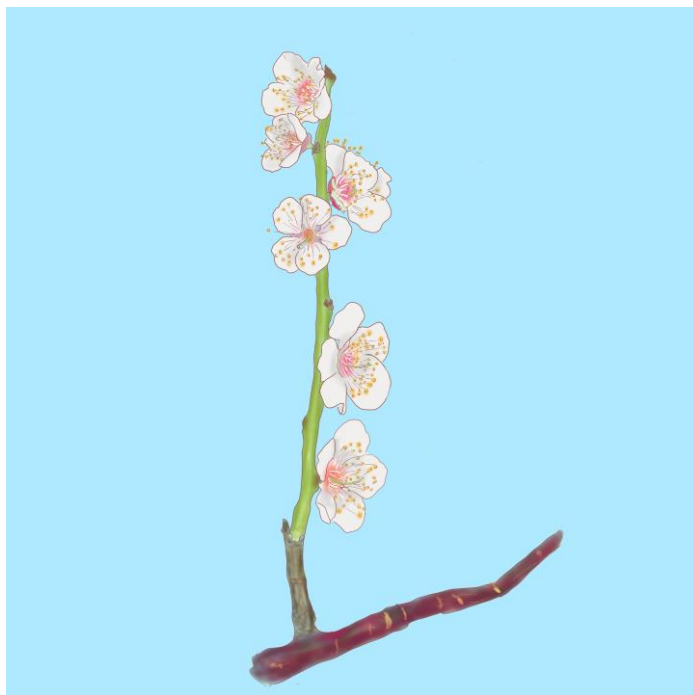
12月25日はクリスマス。世界中の子どもたちが胸躍る日ですね。さて、日本では、クリスマスツリーといえばもみの木が一般的ですが、欧米では、モミやトウヒの仲間が幅広くクリスマスツリーに使われているようです。常緑の針葉樹には神秘的な力を感じるのでしょうか。さて、北海道には、国産、外国産を問わず、常緑の針葉樹がたくさん植えられておるのですが、あくまで私の個人的意見ですが、最も、クリスマスツリーにぴったりだと感じたのは、プンゲンストウヒ（コロラドトウヒ）です。枝先の葉が白っぽく、真夏でも雪をかぶっているように見えます。



樹木とキノコのスケッチ～描いて発見する自然のすばらしさ～（中田真也子）

新年おめでとうございます。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。

年初からパンデミックで大変な騒ぎですが、自然の美しさは変わりません。こんな時だからこそ、より多くの方が身近な自然の美しさ、面白さに気づいてほしいと思います。



<ウメ>

幕張海浜公園には小さな梅園のウメの花がもう咲き始めました。これから3月まで色々な梅が咲いていくと思うとワクワクします。

ウメには早咲きから遅咲きまで梅には数々の品種があるんですね。アンズの交配種もあってまた種類が多いのだとか。奥が深いですね！

こんなに寒い時期に咲くのにじつは梅は寒さに弱く、寒冷地で育てられているのはアンズとの交配種なのだそうですね。

栃木の山里で育った義母から聞いたのですが、昔は家に必ず梅を植えたので、桜よりも梅の方がずっと身近な木だったそうです。梅の花咲く風景がそのもの山里の風景だったと思うと、なんだかまたウメに愛着が湧きます。

2021年1月6日幕張海浜公園

<モチノキ>

近所のマンションの敷地にあるモチノキに真っ赤な実がなっているのを見つけて嬉しくなりました。

この実は冬の間長く木に残っていますね。

モチノキは、庭木として珍重され「庭木の三大名木」の一つとされていたようですね。老木になってからの樹形の美しさと冬に長く楽しめる赤い実が好まれたのでしょうか。今でも日本庭園を訪れると必ず出会う木ですね。

でも、私の住む街では調子の悪いモチノキばかりが目につきます。カイガラムシやすす病に侵されて息も絶え絶え生きている木が多いのです。だから赤いきれいな実はなかなか見られません。

手をかけられて見ごたえのある木に成長するモチノキは、ほったらかしで1年に1～2回一律ざっくり刈込まれてしまう街路樹や公園樹の手入れは向かないのだらうと思います。また夏の暑さと乾燥も弱る原因の一つかもしれません。

モチノキの今の姿は、日本の「庭」文化の変遷をそのまま表しているような気がして、弱りはてた姿も愛おしく感じてしまいます。

2021年1月7日千葉市美浜区



小学校自然観察支援ネットワーク(SSN)実施記録(報告書)は会の宝です

佐口美智子(千葉市)

SSNの活動は20年以上続いています。私は2010年に河添さんからSSNの実施記録のまとめをする役目を引き継ぎましたが、今度は川瀬さんにバトンを渡すことになりました。そこで皆様から届く記録を拝見していて感じてきたことをお伝えしたいと思います。

実施記録(報告書)は「自然観察ちばの宝」だと思います。それは自然環境の変化だけでなく、活動に向けての指導員の皆様の意気込みやお子さん方の成長していく様子などが読み取れるからです。

毎年同じ学年・フィールド・時期での実施でも、決して同じ観察会になることはないのです。お子さん方に自然の素晴らしさや面白さ、命の大切さを伝える工夫を毎回行っているからなのです。

社会の動き、天候、フィールド、その周辺の環境の変化に臨機応変に対応できるのは、チームワークの良さだけでなく、指導員の方々お一人お一人が研鑽を積まれている結果だと思います。

観察会の開催日が、雨天になってしまうことがあります。予備日の設定がない場合、日頃から準備をしているパワーポイントを使って地域の自然の特徴を説明したり、クイズを出題しながら鳥の観察のポイントを知らせたり、サンプルを集めて室内で観察したり、1階の教室から校庭や学校林にやってくる鳥を観察したり、野外でなくても効果的な観察会が行えるよう、常に考えて準備していらっしゃるのです。

ひと学年の児童数が100人を超える学校では、少ない指導員での実施にも様々な工夫がありました。地域の同好会などのお仲間の協力や、一日に3回、あるいは4回もの実施で乗り切っていることです。情報の共有や体力の維持などを考えると頭が下がります。



お子さんや保護者の方々、学校からの信頼が厚いこともこの活動の素晴らしさの一つです。SSNの活動初期からずっと依頼が続いている学校や、10年以上継続している学校が多いことでもわかります。新しく依頼がある場合は実績のある学校からの紹介によるものがほとんどです。また、観察会に学習ボランティアとしてお手伝いいただいた保護者の方々からは、自然と向き合う子どもたちの姿や自然の素晴らしさを共に分かち合い感動した体験から、下の子の時にも観察会を実施してほしいと願われたことが記載されていました。お子さん方からも、次の4年生にも是非観察会をやってあげてほしいとの感想があったそうです。



お子さん方が自然への関心を深めていく様子や、そこに自分たちの生活の場や学びの場があることに誇りを感じ、この環境を大切にしていこうという気持ちが高まって行く様子がうかがえました。また、自然観察へいざなってくれる指導員へのあこがれや、フィールドを保全する人々や安全に観察会を実施するために足場を整えてくれている方たちへの子どもたちからの感謝の言葉も綴られていました。



郷土愛や大人との信頼関係の深まりが感じられました。

昨年、コロナ禍により自然観察指導員が参加しての学習が春には中止となりました。様々な学校行事が取り止めになる中、7月には一部再開するところができました。感染予防を図りながらの観察会にご苦労が多いのですが、お子さん方の心身へのケアにも役立っていくと思います。



自然観察を通して、お子さん方が成長する様子が伝わる実施記録を拝見するのが楽しみでした。これを何かに役立てられないかと思っています。

長らく大変お世話になり、ありがとうございました。

自然観察ちばの会員は続けますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。